

## 再生プロジェクトの始まり

1980年、ミネルヴァ学園の小嶋禮子理事長が岡本太郎氏に横浜市金沢区の並木幼稚園のシンボルとなる壁画を依頼された。園を訪れた太郎氏は、海が近いから『海辺の太陽』にしよう、と原画を描き上げ、モザイク壁画として制作されて以来、園のみならず、まちの人々にも親しまれてきた。2008年の夏、開園30年に合わせ、老朽化してきた壁画の再生の話を、タイセイ総研の杉本賢司上席研究員からいただいた。早速、現場に伺い、優しい顔をした太陽と、真っ赤な稚魚が描かれた壁画からガラスモザイクが剥離している状況を見た時に、とても悲しい思いをしたことを覚えている。

## 岡本太郎氏とINAXのかかわり

岡本太郎氏は1952年、愛知県常滑市の伊奈製陶(現・INAX)を訪れ、パブリック作品の先駆けとなったモザイク壁画『太陽の神話』と、地下鉄日本橋駅地下道のモザイク壁画『創生』を制作している。この『創生』制作中には、粘土で陶彫『顔』も制作し、それ以降、制作のために何度か来社されていた話を先輩から聞き及んでいた。このため太郎氏の作品が傷んでいるのを見て、即座に再生への協力を決意した。また、2007年に「INAXライブミュージアム」で制作した「イスラームのタイル張りドーム

天井」の工法と同様に、ガラスモザイクを原画のとおり敷き詰め、その上に特殊なフィルムをかぶせて仮固定した後、外壁に施工する手法を用いることによって、再生は可能であると確信したのである。

## 岡本太郎氏の子どもへの思い

再生の参考に岡本太郎氏や敏子さんの著書を読み始めたが、太郎氏の子どもに対する思いが書かれており、大いに感動した。また、岡本敏子著『芸術は爆発だ』[小学館/1999]の中には、「子供は全部天才だ、というのは人間全部天才だ、ということなのだ。誰でも自分で自分を限定してしまって、狭い枠の中に閉じ込めている。(中略)どうして本来のままの自分にならないのだ。子供はまだ、それを持っている。それを絞め殺さないでくれ、彼はそう叫んでいるのだ」とあった。そして、最初に並木幼稚園のモザイク壁画を見た時に感じた“優しい印象の太陽”にも納得がいった。同時に、このモザイク壁画を再生するということは、この太郎氏の思いも再生しなくては意味がないことに気がついた。

## 岡本太郎になった気持で再生する

再生にあたっては、岡本太郎になった気持で作業をするという方針を決めた。当時の職人も、同じ気持だったと推測する。最終的に使用

したガラスモザイクは、約23万枚。7×10mの壁面を、2×2cmのガラスモザイクで埋め尽くすには、単純計算で17万5千枚必要だが、原画の色彩やラインを忠実に再現するため、四角い形状のままではなく、ピースを一つひとつ丁寧に手作業でカットして配置した。その結果、5万5千枚分のタイルが余分に使われることになった。3人の職人が気持を込めてタイルをカットし、45日をかけてモザイク壁画のシートを作成した。

## 除幕式を迎えて

2009年9月1日に、岡本太郎記念館館長の平野暁臣氏を始め多くの来賓が参列し、除幕式が行われた。子どもたちが、どう感じてくれるのだろうかかなり心配だったが、除幕と同時に歓声が上がった。きれいになったモザイク壁画に何かしら感じてくれたものと思う。今後、この前で遊ぶ子どもたちに、岡本太郎氏の子どもに対する思いが伝わっていけば、こんなうれしいことはない。

最後になったが、常滑での検品の際に自らガラスモザイクを並べていらっやった小嶋園長先生を始め、関係した各位に心から感謝の意を申し上げます。



- 1—再生した『海辺の太陽』
- 2—ディテール:魚のラインはくっきりと、波は動きがあるように表現されている
- 3—ガラスモザイク敷き詰めの様子
- 4—岡本太郎になった気持で…
- 5—『顔』を制作する岡本太郎氏[撮影:1952年、所蔵:INAX]

ごとう・やすお——INAX文化推進部ミュージアム活動推進室室長